

内閣総理大臣賞

私が使っている水

京都府 綾部市立上林中学校 一年 柏原 葵

私は六年前、大都会の大阪から、上林というとても自然豊かな場所に引っ越してきました。上林に引っ越して来るまでは、何もしなくても、じゃ口をひねれば水がでてきました。お風呂も、ボタン一つおせば、きれいな温かいお湯がたまっていました。

しかし、上林のくらしは全然ちがいました。特に私が住んでいる集落は、水道がきていませんでした。三年前まで山水をろ過して使用していました。

山水を使っていたころは、水量も少なく、お風呂に水をためるのも、すごく時間がかかりました。私の母に聞いてみると、山水で大変だったことは、「水圧が弱いこと」そして、雨がたくさん降ったときに「水がにごること」もう一つは、雨の後、パイプが詰まって、「水が出なくなる」とです。

私たちが使用している山水は、山奥の方から、長い長いパイプを下って、家の近くの貯水タンクでろ過されて、私たちの家に来ていました。そのため、水量も少なく、水圧も弱くなります。

それに、台風のように、たくさん雨が降ると、いろいろな葉っぱやどろなども混ざって、勢いよく流れてくるので、ろ過しきれず、少しにごった水が、家に届くときもあります。でも、母がいちばん大変だと言っていたのは、台風で、水が出なくなったりするときです。時々、台風のとく、水が流れるパイプが葉やどろでつまってしまったり、はずれてしまったりする場合があります。その時は、雨の中、地域の人と水源まで見に行つて、パイプをそうじしたり、はずれたパイプを直したりしています。しかし、水源に行くのは、その時だけではありません。一年に数回、交代で、見に行かないといけません。もし、パイプがはずれかけていたり、まわりがどろでいっぱいだったら、再度つまり、水が出なくなってしまうからです。私は一度、母といっしょに水源に行つたことがあ

ります。私はついて行って、おどろきました。水源のある場所がすごく山奥で、うす暗い場所だったからです。水の量は、川のようにたくさん水が流れているというわけがなく、ちよろちよるとわき水程度でした。パイプも、とても細いのが通っているだけだったので、自分達が使っている水の大切さ、ありがたみを感じる事ができました。

しかし、私は一つ、疑問に思いました。なぜなら、私の家は、現在、井戸水を使うようになり、山水は使わなくなっていたにも関わらず、母や父は山水の貯水タンクのそうじに参加しているからです。不思議に思つたので、母に尋ねると、「もし、井戸が枯れたり、電気がなくなると、井戸水を上げるポンプが使えなくなり、また、山水を使うことになるから。」と答えてくれました。母が水のことを大切にしている思いが伝わり、私も、これから、もっとそうじに参加していきたいと思いました。

今は、井戸水になり、水がにごったり、水圧が弱くなったりして、困ることも無くなりました。ですが、井戸水も、いずれ枯れてしまいます。私は、これからも毎日のように使っていく自然の水を、大切に使うことと思います。

水は、私たちのことを苦しめることもたくさんあります。でも水は、私たちに、無くってはならない存在です。その水を守っていくのは、私たち、人間だと思えます。自分たちにできることは、ポイ捨てをしないことや、ゴミ拾いをする事など、本当に小さなことかもしれませんが、でも、今、一人でも何かしないと、いつか私たちに必ずかえってきます。そうならないためにも、私たちにできることは何なのかを考えることが大切だと私は思います。

厚生労働大臣賞（優秀賞）

水と共に生きる

栃木県

佐野日本大学中等教育学校

二年

林 咲結理

水は、私たちに利益を与える時と、害をもたらすことがあります。

私は先月、旅行で黒部ダムを訪れました。黒部ダムは、日本最高堤高、一八六メートルもある、大きなダムです。放水されるダムはともきれいでしたが、その影には、先人たちの努力の結晶がありました。黒部ダムに行くまでのトンネルで、青い光に包まれた何メートルかがありました。そこは、大破砕帯。岩盤の中で岩が細く割れ、地下水を溜めこんだ地層から毎秒六六〇リットル、平均温度四度の水が流れ出て、約八十メートル進むのに七ヶ月もかかった最大の難所だそうです。この大破砕帯を作るのを含め、黒部ダム建設では二五八人も亡くなったそうです。この大破砕帯を通る時、いつもとちがう気持ちになりました。水を使って発電をするという目的で、人々のために作られるのに、多くの人が亡くなっている。私は、とても考えさせられました。

このようなことや、台風、津波など、自然災害で大きな害をもたらす水。水は、時には人々を苦しめる時もあります。しかし、人々を救う時もなくさんあります。干害により、水がなくなってしまった時に配給される水。ごはんを炊く時に使う水。お風呂の水。水は害をもたらすことでもあります。やはり水は多くの人から必要とされる大事な物なのです。そんな水が健全な循環ができるようにするために、私たちができる事は何か、考えてみました。一番簡単にできることは節水だと思います。洗濯の回数を減らしてまとめて洗うこと。また、汚れのものを流さないことも大切です。排水口に水切りネットをつけて、食べ物のくずを流さないこと。そして、何よりも大切なのは川や海にゴミを捨てないこと。身近な所から、少しずつできることをやるだけでも、ずいぶん結果は変わってくると思います。このようなことをして、人間と水が「共に生きる」ことができる社会を作りたいです。また、私が考える「共に生きる」というのは、節水以外にもう一つあります。それは、「水について知る」と

いうことです。まず、海の水は太陽の熱で温められて水蒸気になり、やがて雲になります。そして、その雲は山にぶつかったりして、雨や雪になって降ります。この水が、地下にしみこんで地下水になったり、ダムを通して川、海、湖などに流れついたりします。また、生活用水としてくみ上げられる水もあります。くみ上げられた水は、取水地でたくわえられます。次に、着水井を通してくみ上げられた水の量、水質などが把握されます。そして、沈殿池を通してよごれを沈殿させ、ろ過池でさらに細かいよごれもとりのぞかれます。そして、塩素混和池で消毒され、きれいになった水は配水池から蛇口へと運ばれます。このような水の循環を知ることでも大事ではないでしょうか。なぜなら、水について知ってれば、水に関するお仕事をやってくれている多くの人たちに、感謝の気持ちを持てるからです。感謝の気持ちを持っていれば、節水をするのを常に心がけることができると思います。その結果、浄水場での負担を少しでも減らせることになると思います。私の住んでいる栃木県は、海なし県なので、海を掃除するボランティア活動に参加することはほとんどできませんが、水について知ったり、節水することはできます。身近な所から水を知ったり、節水をしたりすることで水と「共に生きる」ことができるのではないのでしょうか。

私たちによって支えられている水、水によって支えられている私たちがかけがえのない水と「共に生きる」には、まず私たちの努力から始まると思います。

農林水産大臣賞（優秀賞）

大地と街を潤す豊川用水

愛知県 豊川市立南部中学校 三年 河邊 心那

新型コロナウイルスの状況も落ち着き、私たちの学校でも授業や学級生活が再開しました。六月三日からは給食も始まり、地元の食材を生かした献立を楽しんでいます。私たちの住む豊川市やその周辺では、特に、シソやウズラの卵が有名で、東三河地方が全国シェアの半分以上を占めているそうです。最近ではバラやスプレーマムなど、多岐にわたって全国トップレベルの生産をあげています。

そこで私は、昨年の夏休みに豊川用水について調べたり、頭首工を見に行ったりしたことを思い出しました。八十キロメートルに満たない豊川流域では、毎年のように洪水や干ばつに襲われ、五十万人以上の農民が苦しんでいたそうです。松原用水という細い用水路が一五六七年に造られたことから、どんなに長い間、人々が水に悩まされてきたかがわかります。明治時代になって、牟呂用水や神野新田という三河湾沿いの干拓地ができますが、水の安定供給によって人々の生活も安定したのは、豊川用水の完成があつてのことです。

豊川用水の完成によって、豊川が流れていない、愛知県の先端田原市までが、豊かな農地になりました。昔の田原市では、地下水やため池を使用した農業に、限界がありました。水不足にも強いサツマイモや小麦しか育たなかったそうです。今では、メロンやキク、養豚などで日本の農業をリードし、市町村別農業産出額は四年連続で全国一位に輝いています。一年間で使用される二億六千万立方メートルのうち、七十パーセントは農業用水に、二十四パーセントが水道用水に使われているとわかりました。私が特に驚いたことは、新城市大野の頭首工から渥美半島先端の初立池まで八十二キロ。豊川本流よりも用水の方が長いということです。さらに、電力を使用せず、自然の力だけで流れていると聞いて、びっくりしました。渥美半島は起伏があるのに、どんな工夫があるのか不思議に思いました。

もう一つ強く感じたことは、ダムのおかげです。決して長くはない豊川には二つのダムがあります。古くからある宇連ダムは、一九八十年代に一度干上がった、ダム底に沈んだ村が現れたと聞いたことがあります。豊川流域や豊川用水が水不足で困らないように、二〇〇一年には大島ダムが完成しました。それでもまさかの事態に備え、天竜川の佐久間ダムから通水もできる仕組みがあるそうです。私たちが生きていくうえで、水はなくてはならないものです。水に困っていた東三河の農業が大きく変わり、私たちの町に水が安定してやってくるのは、上流に住む人々のダム建設への理解と協力があつてこそです。故郷や住んでいた集落がダム底に沈んでしまった人たちがいることを、決して忘れてはいけません。水の供給や農作物生産がこれからも持続可能であるために、私も植林活動や河川の清掃に積極的に参加したいです。

豊かな田園風景やスプリングラーが勢いよく回る野菜畑。日本屈指の農業王国になった東三河。私たちの大地を潤すのは、豊川用水を流れる豊富な水のおかげだと、改めて感じました。豊川市という名の通り、自然に流れる川はもちろん、そこに生きる人々の苦勞や努力や知恵に支えられてできた用水やダムがあつて、水が流れ続けていることがわかりました。

豊川用水通水五十周年を迎えた今、あたりまえに手元に届く水のありがたさをかみしめ、この土地に生まれてきたことに感謝したいです。半年後には進学先を決定し、卒業の準備に向かいます。地元の食材を生かした給食をいただけるのも、わずかな期間となります。新しい土地、新しい世界に旅立つ期待と不安はありますが、きっと故郷の大地が支えてくれると思います。しっかりとこの土地に根を張って生きます。水が大地に染みわたっていくように。

経済産業大臣賞（優秀賞）

水の旅

熊本県 熊本市立出水中学校 一年 清水 遥

私は川の上流で生まれた水です。

そこは流れが速く、ゴツゴツした大きな岩が沢山ありました。流れが速く、水温が低いのでヤマメなどが住んでいます。水の中で暮らすトンボなどの幼虫もいるようです。見上げると川にはり出した枝の上に鳥たちがとまっています。魚をねらっているのかな。水の周りには多くの生き物たちがいるのです。

中流にやってきました。中流は上流に比べて流れがゆるやかで、周りに家も増えてきました。昔は、川原で遊ぶ子供達が多かったんだって。今はあんまり子供達が来なくなって少しさみしいな。流れがゆるやかな中流の岩にはコケが生えています。このコケをアユが食べます。また、そのアユを釣ろうとチャレンジしている人もいます。

私は、細い別れ道に入ってしまった。取水口です。そこから用水路に流れて行きカラカラに渴いた田んぼの土の上を走り出しました。土は、みるみるうちに水びたしになりました。

「ゴゴゴゴ……」
という音がします。田植えです。大きな機械で沢山の苗を植えています。何日かするとおたまじやくしやアメンボなどの生き物がやってきました。秋の収穫まで見ていたいなと思ったとき、私は地面に吸い込まれるように土の中に落ちていきました。

そこは、真つ暗。そこには水の仲間達がたくさんいました。他の水たちは同じように田んぼ、川からきたり雨となってきたようです。真つ暗な中で私は眠くなってきました。

目を覚ますと、体がだんだんに押し上げられていくところでした。ブワツとみんなと一緒にあふれ出します。ここは、熊本市の動植物園の近くにある自噴井です。

なんだか、体に薬の匂いがする。水を殺菌しているのです。消毒が終わるとまた、水のたまり場にやってきました。今度は、配水池。水道に通す水を貯める場所です。

細い管のながい道を通り、広げたところに出ました。どんどん仲間が増えてたまっていきました。お風呂です。だれか、お風呂に入ってきました。お湯になった私達につかり、体を温めているようです。しばらくするとお風呂の電気が消えてしまいました。浴槽の下の方からゴゴゴゴ……という音がします。吸い込まれて落ちていってしまいました。

また、真つ暗な所に出ました。体が自由に動かさずベトベトしています。そこは、下水でした。それから下水の水が溜まっているところにやってきました。私の体はいよいよドロドロです。でも、流れのつたり溜められたりしているうちに、そのドロドロが少しずつはがれ落ちていきました。それを何回も繰り返すうちに、体が透き通って見えなくなりました。そして最後に消毒をされ、川へと流されました。

体がしよっぱくなくなってきました。ここは海ですね。しばらく波に揺られていました。天気が良いといい気持ち。すると、
「あつ。」

急に体がふわつと浮かび上がりました。蒸発しているのです。空の上までやってきました。それから仲間が集まってきて、小さな雲になりました。まわりには他にも小さな雲たちが沢山あります。その小さな雲と合体し、大きな雲になるとひとりずつ雨になって落ちていきました。

降ったところは知らない町でした。私を大切にしてくれる人たちが多い町だといいな。

国土交通大臣賞（優秀賞）

水と関わり合う日々

「よろしくお願いします。」僕はそうプールに向かって、一礼をしてから練習に臨む。それは、ほぼ毎日のことである。

プールを目の前にして僕は、「このプールに水を一杯にするには、どれだけの水が必要なのだろう。」そう考えていたら、つい最近、父と母が、「八ッ場ダムが三月三十一日に完成するらしいね。」と話していたことを思い出した。

いつの間にか、練習に集中して、ヘトヘトになって迎えに来てくれた父の車へ乗り込んだら、八ッ場ダムの景色を思い出していた。

「そうだ。僕は、八ッ場ダムに沈む前の景色と、沈んだ後の景色を見ていたんだ。」そう父と話しながら、家の中へ入ると、カレーのいい匂いと母の「おかえり。」の聲が迎えてくれた。父は、「ダムカレーかな。」と笑いながら言う。母は、「ダムカレーにしようか。」と笑いながらテーブルにカレーを並べる。そして、車の中での話を、カレーを食べながら話した。

僕がまだスイミングの選手コースに入る前は、夏休みや連休にはいろいろな所へ連れていってもらった。その中のひとつが、草津温泉だ。草津へ行く時は、吾妻溪谷を通って行っていた。母は、特にこの溪谷が好きだった。夏は、眼下に見えるキラキラとした川や、緑の濃い木々の間から見える日差しが眩しかった。秋は、紅葉がとてもきれいで、母は、「きれいだね。」「あそこもきれいだよ。」とみんなに教えてくれた。僕が、この溪谷について記憶があるのは、母のおかけかもしれない。いつの頃だったか、父や母が、この溪谷を通っている時、「この景色は、次に来た時は見れないかもしれないね。」と話していたことを覚えている。

父と母は少しなつかしように話をしながらこう続けた。八ッ場ダムは、この間の台風十九号の時、被害を少なくしてくれて、台風から守ってくれたということ。それに八ッ場ダムに限ったことではないけれど、ダム

群馬県 渋川市立渋川中学校 二年 大谷 優斗

があるおかげで、水害が少なくなるし、水不足にならない様にしてくれるということ。それと、発電もしてくれるということ。けれども、ダムができた場所には、住んでいた人がいて、町があつて、生活があつたということ。そういったたくさんの方の協力があつてダムはつくられたということ。改めて聞いて、再確認したことで僕は、ダムができる前の吾妻溪谷を、家族と一緒に見た景色を、決して忘れないと思つた。

今日も僕は水の中に居る。きっと同じ中学校の友達の中でも水の恩恵を受けているということに気づかせてもらった。

「ありがとうございます。」僕はそうプールに向かって一礼をしてから練習を終える。それは、僕が学童のコースから選手コースへ入った時、今は天国へ行ってしまったコーチが僕に「いいか。プールで泳げるということを当たり前にはいけないんだぞ。」と教えてくれたことを胸に、今まで以上に感謝の気持ちを込めて、大きな声で「ありがとうございます。」と言おう。

環境大臣賞（優秀賞）

未来に繋ぐ優しい水音

宮崎県 宮崎県立宮崎西高等学校附属中学校 三年 大城 冨和

川の流れのせせらぎ、波の音、雨音等、これらは全て水が奏でる音だ。人の生活の中にはいつも水音、つまり水が寄り添っている。

私が以前住んでいた長野県松本市には、「まつもと城下町湧水群」と呼ばれる井戸や湧水が沢山あった。したがって、海はないが水はいつも身近な所に存在した。これらは江戸時代には、人々の日常生活や防火用水として利用されていたそうだ。市内には水音が常に響いており、私はその音を聴きながら、城下町を家族でのんびり散歩することが好きだった。「水巡りマップ」を片手に古い町並みを探検し、水場で湧水を飲むと、まるでタイムスリップしたような気分になったものだ。また、江戸時代に町の境界線としての役割も果たしていた水路は、時代を経た今も、潤いを与えてくれている。このように水を上手く利用し、町も文化も発展し、今がある。そのことを古い町並みと心地よい水音が私に教えてくれた。

その一方で忘れてはならないことは、水が与えるものは恩恵だけではないということだ。近年、日本では「観測史上最大級」、「未曾有」という言葉のついた水害が多く発生している。大規模な被害をもたらす台風に着眼してみると、温暖化の影響で関東や中部等を通る東寄りの軌道が増え、その勢力も年々強くなってきているようだ。昨年の台風十九号は、複数の都市に、甚大な被害をもたらした。そこには長野県も含まれており、私の祖父母の家も浸水の被害を受けてしまった。「七十年近くここに住んでいてこんなことは初めて」、「長野県にこんな大きな台風が上陸するなんて。」と祖父母は口々に語った。テレビの映像や送られてくる写真では、私のよく知っている場所が水没し、幼い頃に祖父母と遊んでいた公園も災害ゴミで見る影も無くなっていった。そして、避難場所に指定されていた場所さえも浸水してしまい、避難していた人々が再避難する状況も起こったそうだ。私は大きなショックを受けた。

小学校四年生の時に、長野県から宮崎県に引越して来た私は、両県の水害に対する対策に違いがあると感じた。海がなく、台風もなかなか上陸することのない長野県では、学校の避難訓練で屋上避難の練習をしたことがなかった。また、雪への備えはしたことがあっても、台風への備えはしたことがなかった。昨年の台風十九号が未曾有の災害であったのは確かだ。しかし、長野県で被害がより大きくなってしまった原因の一つに、地域による水害への対策や意識の違いもあったように思う。私が宮崎県で初めて台風を経験した時、風雨のあまりの威力に驚いた。宮崎県での生活は、私の水害に対する意識を大きく変えてくれた。厳しい冬や大雪に対して適切に対応できる長野の人々。津波に備え、台風に対しても適切に対応できる宮崎の人々。両県に住んでみて、同じ日本でも、その土地その土地の自然との付き合い方が、知恵として根付いていることに気付かされた。

水資源が豊かな水の国日本。しかしそれは同時に、水害と常に隣り合わせであるということだ。これまで人々は、治水事業を行いながら水と共に生きてきた。地球温暖化による気候変動により、私達はおそらくこれから先何度も未曾有の水害を経験するのだろう。水なしに人の生活は成り立たない。私達は水に翻弄されつつも、水に生かされている。だからこそ私達も、水害に立ち向かいそして学び、昔の人々が繋いでくれたバトンを新しい形で次に繋げていくことが大切だと強く思う。心地よい水音が響く、美しいこの国を後世に継承していく為に。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

水の向こうにあるもの

愛媛県 愛光中学校 一年 井上 愛理

目に見えない敵をかわすため、私はただひたすらに手を洗う。こうすることで、少しだけ心が平穏になる気がした。せっけんを泡立てる手の向こうには流しっぱなしの水。

分かっている、いや分かっているつもりだった、水は大切だということ。自分にとって大切なのか、いや世界中の人々にとって大切なのか、この水は。

ハツとして、私は勢いよく流れている水を止めた。この水は、みんなのものだ。

世界中に猛威をふるっている新型コロナウイルスには、手洗いが有効だということは何度も何度も聞いた。衛生的な水でいつでも手を洗うことができない、これは当たり前ではないと知ったのは、最近のことだった。私の住む地域では平成六年に大洪水が起き、時間断水を行ったため、夏場に四〜五時間しか水が出なかったそうだ。一日のうち、蛇口から水が出る夕方の数時間以外は、お風呂やバケツなどにためた水が無駄遣いしないように少しづつ使っていたと聞いた。日本は地震や水害など、多くの災害が起こってきた。長期間の断水が続く状況は、想像を絶する苦労があっただろう。未知のウイルスにおびやかされている今、もしこのような状況になってしまったら、生活に支障が出ることはもちろん、思う存分手を洗うこともはばかられ、きつと精神的にもつらい日々となるはずだ。蛇口から水が出る、それは当たり前前のことではないのだ。

地球規模で考えると、災害という理由だけではなく、日常的に水が使えない国や地域があることを知り、私はがく然とした。安全な水が手に入らない人は、世界で六億六千三百万人もいる。身近なところに水がなく、子どもたちが水をくむという重労働を強いられ、一日の大半の時間と労力をそのために消費し、教育を受ける機会もないということを知った。

また、水が使えないために手を洗う習慣自体がない国もたくさんあるそうだ。世界中で手洗いの重要性が叫ばれている今、もしこのような国や地域で感染症が流行してしまつたらどうなってしまうのだろう。水が使えない人々の生活や気持ちを考えると、胸が痛む。感染症を防ぐ手洗いという手だてもないままに、命の危険にさらされてしまうのか。

水の向こうにあるものは、命。
この水で感染症を防げる。この水で命が救われる。この水で世界は幸せになる。この水はみんなの水だ。ほとんど意識することなく水を無駄遣いしていたことを、私は申し訳なく思った。

自然は時に人間に試練を与える。雨が少なければ干ばつを、多ければ水害を引き起こし、容赦なく刃を振りかざす。自然をコントロールすることはできないながらも、自然と折り合い、共存していこうとする謙虚な姿勢が私たちに必要だ。

二十五年の国連サミットで採択された持続可能な開発目標（SDGs）は、二十三十年までに、持続可能でより良い世界を目指す十七の国際目標となっている。そのうち目標六は「安全な水とトイレを世界中に」と掲げられており、すべての人々の水と衛生への利用可能性と持続可能な管理を確保することがゴールだ。水は限りある資源であると同時に、無限の可能性も秘めているのだ。多くの命を守るために、世界は大きく動き始めた。

今私にできることは、行動を起こすこと。そして、問題に向き合い、考え続けること。水を流しっぱなしにしないことや、募金をすることは、今すぐできることだ。また、水の問題について自分の事として考えてみることでできる。

世界中の人々が安心して衛生的な水を使うことができますように。そして、自然と共存しながらよりよい未来を迎えることができますように。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水のありがたさを知って

栃木県

佐野日本大学中等教育学校 二年

廣瀬 乃々佳

日本のほとんどのインフラは、戦後の高度成長期の一九六〇年代に整備されました。

インフラというのは、道路や上下水道、通信網など、社会生活を送る上でとても重要な存在です。そのインフラは、高度成長期から今日まで五十〜六十年使用されていて老朽化が進んでいる設備がたくさんあるそうです。その中でも水道管については特に深刻だそうです。水道管の耐用年数は約四十年で、現在ではそれを超えて利用されています。そのせいで、年間に約二千か所、つまり毎日日本のどこかで水道管が破裂しているそうです。しかし、様々な理由により破損した水道管を修理したり、更新することが難しくなっているそうです。原因の一つは、労働力不足です。少子高齢化の影響で約八万人いた水道事業従事者が現在は五万人を切ってしまっています。それにより、計画的に管路をつくる知識を持っている人がいなくなってしまうのです。また、国の予算もインフラの修理に回らず、不足しています。その結果使えなくなったインフラ設備をそのまま放置することも多いようです。また、データ不足や管路図の紛失も大きな影響を及ぼして修理や点検を行うのに対応が出来ないことがあるそうです。

水道管をすべて更新するには百三十年以上もかかる計算になるそうです。だとすると、耐用年数が四十年といわれているのに百三十年もかかるということは、修理が追いつかないということになります。

水道管について調べてみて、私は本当に驚きました。私が生まれた時から水道は当たり前前にあり、蛇口をひねれば水が出てきます。飲料水としても何の不安もなく使ってきました。断水というのも経験したことはありませんでした。もし、水道が無くなってしまうたら、使えなくなってしまうたら、と考えたら急に不安になりました。

そして、数週間前の台風で、千葉県の人たちが大きな被害を受け、未

だに電気が復旧していない場所があり、不慣れた生活を送っている地域の人たちがいるというニュースを見ながら、私の住む町でもいつ同じような災害が起きてもおかしくないのだと思いました。そこで試しに水道管について調べてみて水がどれほど大切で水道がどれほど大事なものであるかを実感してみようと思いました。

週末に一日だけ、水道を使わずに生活してみました。まず、朝起きて顔を洗って、歯を磨いて・・・と思い水道に手をかけて止まりました。毎日無意識に水を使っていることを朝一番に実感しました。そして、トイレを済ませて出てくると、母親に「トイレを流す水も水道水だよ。」と言われ私はハツとしました。飲み物はペットボトルで済ませることができましたが、食事は水を使わずに調理するのは難しく、結局、非常食として備蓄してあったアルファ米と缶詰を食べました。ただ、食後に食器を洗えずにどうしたらいいのだろうと困りました。なるべく洗い物を出さないように生活することを考えなくてはいけないのだと思いました。

洗濯物も一日洗わずにいても、ずっと洗わずにいるわけにはいかないし、お風呂も一日くらいなら入らずに我慢できますが、何日も体や髪の毛を洗わずにいるのは不快でたまりません。

たった一日だけの断水体験でしたが、やってみて感じたことは、今まで本当に何も考えずに当たり前のように蛇口から出てくる水を貴重だとも思わずに使い続けてきたという自分の無関心さに気づかされました。

この体験を生かし、これからは水道のありがたさを心に持ちながら、水を大切に使うように心がけて生活していこうと思いました。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

つなぐ：水

福岡県

福岡教育大学附属福岡中学校

二年

宇野

誠洋

まるで昇り龍のようにその「水龍」は駆け上がってくる。福岡導水だ。大好きな祖父が住む久留米市を流れる筑後川の筑後大堰から私が暮らす福岡市の水瓶牛頸ダムに向けて、およそ二五キロの道のりを、上り八四メートルという高低差をもろともせず、文字通りかけハシ（八四m）となつて駆け上がる。

「水龍」は二カ所だけその姿を地上に現す。筑後平野を貫く九州自動車道を久留米へと疾走するとき、福岡都市圏の守り神であるその銀色に輝く胴体（水管橋）を見つけた瞬間、私はワクワクして誇らしい気持ちになる。

昨年私は筑後導水につながる何か所かの施設を見学した。桜満開の春に訪れた寺内ダムは、二〇一七年七月の九州北部豪雨において、水だけでなく大量の土砂や流木もせき止めた。限界水位まで五七センチに迫る中、筑後川に接続する佐田川を氾濫させまいと、朝倉・久留米の被害を最小限に抑えた。副所長さんに放流の判断の難しさをお聞きし、無事に守られた祖父母の分まで心から感謝した。

猛暑の夏に訪れた松原ダムは、雨不足で渇水だった。赤土がむき出しの湖岸を見て、毎年変わる気象状況下での水行政の難しさについて考えさせられた。大柄な所長さんに聞くと、一番大きな水門のクレストゲートは、点検以外で実際に開門した事が驚くことに一度もないらしい。渇水であっても、日頃からしっかりと準備することで初めて「いざというとき」に対処できると知った。

筑後川ダム統合管理事務所の指揮命令室には、スイッチや大型モニターがズラリと並び、リアルタイムで筑後大堰や複数のダムや観測地などが映し出されていた。専門的な天気予報図を分析しつつ、まさに統合的に筑後川を管理していることがわかった。

様々な学びの結果、最も印象に残ったのは（人）だった。水の現場では、日夜実直に水を守り、経験と知恵を駆使して判断し、複合的で緻密に水を管理し続ける人たちがいた。私たちが日々享受する安全で安心な

生活は、現場の人たちのたゆまぬ努力によって届けられていることを忘れてはならないと思った。

各施設の成り立ちをひもとけば、そこには必ず人々が苦悩した歴史がある。多くの犠牲者を出した昭和二八年の西日本大水害の教訓をもとに作られた筑後大堰や寺内ダムなどは、たびたび増水して暴れる筑後川を調節し、それ以降多くの市民の命を守ってきた。昭和五三年福岡大渇水の経験からも、悲願の水源としてつながれた福岡導水は、福岡都市圏二五〇万人の水の三分の一を日々送り届け、私たちの暮らしを支えてきた。人が悲しみに暮れる日も、灼熱の太陽が容赦なく照りつける日も……。人が今日まで積み重ねてきた数々の努力は着実に実を結んできたのだ。この恩恵を受ける私は、それら数々の設備を「誰のものでもない」ではなく「私のもので（も）ある」と考えたい。そうすることで、自分ごととして主体的に関わり、これからも感謝を忘れずに、水を大切に続けられると思うからだ。

十二月、久留米の大好きな祖父がガンで天国に旅立った。四季折々の彩りを見せる高良山に幼い頃から祖父とよく登った。筑後平野に横たわる筑後川がゆったりと有明海まで注ぐ。パノラマ風景は、祖父との大切な思い出だ。

闘病生活のある夏の日、私は透明で小さなコップに氷水を入れて、祖父に渡した。祖父はゆっくりと水を口に含み、「あーうまい、ありがとう。おだやかな笑顔で、そう言った。その瞬間のコップの水が透明で美しく、「私たちは生かされて生きている」のだという感謝の気持ちで胸がいっぱいになった。

今日も福岡導水は私に水をつないでくれる。祖父が眠る久留米から笑顔を運ぶように。毎朝その遺影に供える水は、あの日と変わらず美しい。命をつなぐ一滴の水。私は人の心を潤す一滴の水のような人になりたいと思う。